

「満鮮史観」の再検討

「満鮮歴史地理調査部」と稲葉岩吉を中心として

桜 沢 亜 伊

要 旨

종래의 연구에서는 ‘満鮮史’라는 역사적인 틀을 ‘滿洲’와 朝鮮의 역사를 하나로 본 것처럼 이해되어져 왔다. 그러나 ‘만선사’라는 역사적인 틀은 ‘滿洲史’와 朝鮮史라는 역사적인 틀의 존재를 전제로 한 것이었다. ‘만선사’라는 용어는 당초에는 ‘만주 및 조선의 역사’의 생략형에 불과하였지만 稲葉岩吉(이나바 이와키치)는 그의 ‘満鮮不可分論’을 통해 ‘만선사’ 연구를 主唱하였다. 이나바 이와키치의 ‘만선불과분론’과 ‘만선사’라는 역사적인 틀과의 관련에 대해서는 검토해 볼 여지가 있다고 생각된다.

キーワード…… 「満鮮史」 「満鮮史観」 「満鮮歴史地理調査部」 稲葉岩吉

はじめに

今日、「満鮮史」という言葉から想起されるのは、「日鮮同祖論」・「他律性史観」・「停滞性論」等と共に、戦前の日本人研究者が持っていた誤った朝鮮史観の一種だということである。

旗田巍は、戦前の朝鮮史観に対する批判を精力的に行ない、その中で、「満鮮史」という枠組みと、「満鮮史」の名の下に研究を行なった研究者の朝鮮史観について論じている¹⁾。旗田の「満鮮史」批判を代表する論文としては、1964年に発表された「「満鮮史」の虚像 日本の東洋史家の朝鮮観」が挙げられる²⁾。この論文で旗田は、「朝鮮の歴史を滿洲の歴史とわけずに、「満鮮史」とひとまとめにした点に、日本の東洋史学の朝鮮認識、朝鮮史像の特色がある」と述べている³⁾。その上で、稲葉岩吉の「満鮮史体系の再認識」⁴⁾、「朝鮮の文化問題」⁵⁾、「満鮮不可分の史的考察」⁶⁾の諸論文を検討し、「満鮮史」について考察している。

一体、満鮮史なるものは自明なものと思なされるほどに内容が明瞭なのであろうか。普通、歴史を考えるさいに、まず民族が問題になる。朝鮮史は朝鮮民族の歴史として成立しうる。しかし朝鮮と滿洲とを一括した歴史は、民族の歴史としては成立しえない。周知のように、新羅が七世紀に朝鮮を統一して以後、朝鮮は一つの独自の民族として発展してきた。それ以後、朝鮮は一つの民族の歴史をもったのであって、滿洲人とともに一つの歴史を形成するようなことはなかった。滿洲人とは別個の独自の国家、独自の社会、独自の言

語、独自の文化をつくりあげた。したがって、民族の歴史という視点からみると、満鮮史なるものは存在しない⁷⁾。

このように述べた上で、旗田は、「満鮮史的朝鮮観」とは、「朝鮮史の自主的發展を疑うような考え」のことであるとしている⁸⁾。

旗田は「新羅が七世紀に朝鮮を統一して以後、朝鮮は一つの独自の民族として發展してきた」ことを「満鮮史」批判の論拠の一つとしているが、これは渤海史を朝鮮史の一部と見做すか否かという問題とも密接に関わっている。旗田が渤海史を朝鮮史の一部と見做すことに疑義を持っていたことが指摘されているが、「満鮮史」の名の下に研究を行っていた研究者の渤海史認識と関連して、重要な論点であると思われる⁹⁾。

また、上記のような旗田の「満鮮史」批判の論拠については、近年、その「一国史」的見方の持つ限界性が指摘されている。田中隆一は、旗田の「満鮮史」批判について述べた上で、「戦後の朝鮮（近代）史研究は「一国史」的な色彩の強いものとなり、在満朝鮮人史研究などを除けば、「満洲（国）」史研究との相互関係は省みられることが少なかった憾がある」としている¹⁰⁾。井上直樹は、この田中の指摘を紹介した上で、「筆者もまた既往の「満鮮史」研究批判が民族や国家を自明のものとして議論することにとまどいを禁じ得ない」と述べている¹¹⁾。

旗田によって「満鮮史」批判がなされて以降、それに依拠する形での研究が行われて来たが、近年、近代における朝鮮史研究について再検討の動きが見られ、「満鮮史」についてもいくつかの観点から検討が加えられている¹²⁾。

三ツ井崇は、白鳥庫吉の朝鮮語系統論と歴史認識の関連について考察し、白鳥の朝鮮語系統論が「日朝同系論」から「日朝非同系論」へと転換した過程と、「日鮮同祖論」を否定し、「満鮮史」を創始していく過程が並行関係にあったとしている¹³⁾。

滝沢規起は、稲葉岩吉の光海君期対外政策に対する評価と「満鮮史観」との関連について考察している¹⁴⁾。その上で、「満鮮史」について次のように結論している。

稲葉岩吉が主唱した「満鮮史」は本来、日本帝国主義の侵略対象である「満洲」と朝鮮に跨って発生した歴史的な事象を提示することで、両地域の「不可分性」を強調すると同時に、一般に対してそのような思想の普及を図り、「朝鮮民族の發展」と「鮮人愛撫」という論理によって、日本による大陸侵略を正当化することを目的とするものであった¹⁵⁾。

井上直樹は、近代日本における高句麗史研究と「満鮮史観」との関連について考察している¹⁶⁾。井上は、「稲葉の「満鮮史」は歴史的考察によって提案されたものではなく、現実の日本の強力な朝鮮支配と関わって、はじめに「満韓一体」があり、その上でそれを歴史的に説明するために、提唱された」としている¹⁷⁾。

これらの研究では、「満鮮史」に関わる諸問題について重要な指摘がなされているが、「満鮮史」とは何であったのかという問題自体をテーマとしたものではなかったため、この点に関しては未だ検討の余地が残されていると思われる。

本稿では、これまでの「満鮮史」に関する研究においてもとり上げられてきた、「満鮮歴史地理調査部」と、稲葉岩吉の檀君神話・渤海史に対する認識を中心に、「満鮮史」とは何だったのかという問題について再検討してみたい。

一、「満鮮歴史地理調査部」について

1908年1月に、南満洲鉄道株式会社東京支社内に設置された「満鮮歴史地理調査部」は、「満鮮史」に言及した論稿では必ずとり上げられると言っても過言ではない。しかし、「満鮮歴史地理調査室」等、しばしば異なる名称が用いられている¹⁸⁾。

これまでの研究では、「満鮮歴史地理調査部」の持つ政治性や、「満鮮」という二文字を冠したものであるという点を強調するのみで、実際にそこで行なわれた研究がどのようなものであったかというような、具体的な検討が不十分であると思われる。正式名称は果たして何であったかという極めて基本的な点すら見過ごされて来た背景には、このような研究状況があるものと思われる。

1919年に満鉄が刊行した『南満洲鉄道株式会社十年史』では、「満洲歴史地理調査」という項目において、「満洲及朝鮮歴史地理調査部」と称している。

満洲より朝鮮に互る歴史及古代地理は歴史上最不明なる部分に属し学術上の欠陥たるを免れず、会社は此方面の調査が其事業に關係する所浅からざると又一面學術研究を推奨するの趣旨よりして明治四十一年満洲及朝鮮歴史地理調査部を東京支社内に設置し東洋歴史に精通せる白鳥博士之を担任し、数名の学士其他を指揮して調査を進め(中略)大正三年都合に依り一時本調査を中止することとせり¹⁹⁾

満鉄側の記録としてこれを重視すれば、正式名称は「満洲及朝鮮歴史地理調査部」であったと言えるかもしれない。しかし、もし「満洲及朝鮮歴史地理調査部」という名称が、その設置当時から付されていたのであれば、これに参加していた白鳥以下の人々もそのように称するのが自然であると思われるが、実際はそうではない。例えば、稲葉岩吉は1939年に行なった後藤新平についての講演において、「満洲歴史調査部」と称している²⁰⁾。

管見の限り、「満鮮歴史地理調査部」という名称が初めて用いられたのは、1929年に発表された白鳥庫吉の文章である。

こういう事情から沢柳博士の紹介で、初めて後藤伯爵(当時の男爵)に面会するの機会を得たのである。而して自分の意見を述べたところが、伯爵は直に賛成を表せられ、其の結果として、南満鉄道会社に満鮮歴史地理調査部というものを設けられた²¹⁾。

白鳥は、1913年8月に執筆した『満洲歴史地理』の序文で、「韓国」ではなく「朝鮮」と言いながらも、「満・韓史」という表現を用いている²²⁾。「満・韓地方」や「満韓経営」という表現が同時に用いられていることから見ても、「満洲」と朝鮮を併称する際には、未だ「満鮮」ではなく「満韓」と言っていたものと思われる。恐らく、大韓帝国期に「満韓経営」・「満韓問題」といった用語

が一般に使用されていたため、1910年以降、国号が朝鮮と変えられてからも、しばらくは「満韓」という表現が用いられていたのではないかと思われる。1908年の「満鮮歴史地理調査部」設置当時、未だ国号が大韓帝国であったことから考えても、「満鮮歴史地理調査部」という名称は、その設置当時から付されていたものではない可能性が高いと言えるであろう。しかし、「満鮮歴史地理調査部」や「満洲及朝鮮歴史地理調査部」が、設置当時の名称ではなかったとも言い切れず、確かなところは不明である。便宜上、本稿では「満鮮歴史地理調査部」と呼ぶことにしたい。

「満鮮歴史地理調査部」の当初のメンバーは、主任である白鳥庫吉と、箭内互、松井等、稲葉岩吉の計4名で、恐らく1908年4月に池内宏、津田左右吉が加わり、計6名となった²³⁾。これに瀬野馬熊を加える場合もあるが²⁴⁾、瀬野は補助員であった²⁵⁾。刊行された『満洲歴史地理』等にも瀬野の名は見当たらないので、調査研究に参加していたかどうかは不明である。

1914年1月、「満鮮歴史地理調査部」は廃止された。その後、事業は東京帝国大学文科大学に移管され、満鉄から資金の提供を受けつつ、箭内互、松井等、池内宏、津田左右吉の計4名に嘱託して調査が継続された。この間の事情に関して、白鳥は次のように述べている。

この研究に直接従事した人々の名を挙ぐれば、私の他に箭内互、池内宏、津田左右吉、稲葉岩吉、松井等、瀬野馬熊の諸君で私はこれらの人々の研究を監修したのである。（中略）ところが、研究着手後間もなく後藤満鉄総裁は大臣となり、その後に所謂後藤系の人々が満鉄総裁に就任している間は未だよかったのであるが、そのうちに後藤系でない全然別の人が満鉄総裁となるに及んで折角の調査部も閉鎖するの止むなきに至った。副総裁であった伊藤大八氏などは「利益を目的とする会社に、斯様な研究所の必要はないから廃止せよ」と言い、遂にその研究所は満鉄の手を離れることになったのである。併し研究も地理の方がやっと出来上り一段落ついたばかりで、愈々これから歴史の方に取り掛かろうとする時であったので、その儘研究中止する訳に行かなかった。幸い、満鉄が其後の研究に要する費用を少し出して呉れたので、その研究室を東京帝国大学内に移して研究を継続することとなり、それが猶お今日迄続いている次第である²⁶⁾。

東大への事業移管以降は、白鳥庫吉、稲葉岩吉の2名は参加していない²⁷⁾。白鳥は、1914年以降、東宮御学問所において国史・東洋史・西洋史を皇太子（後の昭和天皇）に講義し、また、東洋文庫の設立（1924年）・運営に専念していた²⁸⁾。稲葉は、参謀本部・陸軍大学校・山口高等商業学校において講義を行ない、1922年からは朝鮮総督府の朝鮮史編纂事業に参加し、1937年に「満洲国」に創立された建国大学（開学は1938年）の教授となり、1940年に亡くなるまで在職していた²⁹⁾。参加していた研究者が異なることから考えても、「満鮮歴史地理調査部」において行なわれた研究の実態を明らかにするためには、満鉄支社内に置かれていた時期（1908年1月～1913年12月）と、東大に移管されてからの時期（1914年1月～1941年10月以降）に分けて考える必要があると思われる。

東大移管前に刊行された報告書の書名を見ると、『満鮮歴史地理』ではなく『満洲歴史地理』

と『朝鮮歴史地理』であり、満洲と朝鮮に分けて刊行している³⁰⁾。そもそも、箭内・松井・稲葉の3名は「満洲史」、池内・津田の2名は朝鮮史と、担当も分かれていたのである³¹⁾。東大移管前の「満鮮歴史地理調査部」で行なわれていた研究は、「満鮮史」と言うよりは、「満洲史」と朝鮮史であったと言えよう。

表.1 『満洲歴史地理』第一・二巻 目次

	著者	タイトル		著者	タイトル
第一巻					
引用書目解説					
第一編	白鳥庫吉・箭内互	漢代の朝鮮	第五編	箭内互	南北朝時代の満洲 ^{マム}
第二編	稲葉岩吉	漢代の満洲 ^{マム}	第六編	松井等	隋唐二朝高句麗遠征の地理
第三編	箭内互	三国時代の満洲 ^{マム}	第七編	松井等	渤海国の疆域
第四編	箭内互	晋代の満洲 ^{マム}			
第二巻					
第一編	松井等	満洲に於ける遼の疆域	第六編	箭内互	元明時代の満洲交通路
第二編	松井等	許亢宗の行程録に見ゆる遼金時代の満洲交通路	第七編	稲葉岩吉	明代遼東の辺牆
第三編	松井等	満洲に於ける金の疆域	第八編	稲葉岩吉	建州女直の原地及び遷住地
第四編	箭内互	東真国の疆域	第九編	稲葉岩吉	清初の疆域
第五編	箭内互	満洲に於ける元の疆域			

『満洲歴史地理』第一・二巻の目次を基に筆者が作成した。

表.2 『朝鮮歴史地理』第一・二巻 目次

第一巻			
緒言		第八	新羅征討地理考
第一	涇水考	第九	羅濟境界考
第二	三韓疆域考	第十	百濟戦役地理考
第三	百濟慰礼城考	第十一	高句麗戦役新羅進軍路考
第四	好太王征服地域考	第十二	唐羅交戦地理考
第五	長寿王征服地域考	第十三	新羅北境考
第六	真興王征服地域考	第十四	後百濟疆域考
第七	任那疆域考		
第二巻			
緒言		第十九	元代に於ける高麗の東北境

「満鮮史観」の再検討（桜沢）

第十五	高麗西北境の開拓	第二十	高麗末に於ける鴨緑江畔の領土
第十六	高麗東北境の開拓	第廿一	高麗末に於ける東北境の開拓
第十七	尹瓘征略地域考	第廿二	鮮初に於ける豆満江方面の経略
第十八	元代に於ける高麗西北境の混乱	第廿三	鮮初に於ける鴨緑江上流地方の領土

『朝鮮歴史地理』第一・二巻の目次を基に筆者が作成した。

また、以下に引用する白鳥の回想によれば、満鉄支社内における調査は、「満洲朝鮮の歴史を研究する」ための地理考証の段階にとどまっていたのである。

七年間かかって上に述べたような結果を得たけれども、それは自分の目的とする研究の端緒であり基礎であるに過ぎない。満洲朝鮮の歴史を研究するのが目的で、其の根柢を作る為に先ず地理を調査したのであるが、これからいよいよ歴史の方に手をつけようとする段になって、調査部を廃せられたのでは、最初の目的が達せられない。これは是非とも継続したいものであると考えた³²⁾。

では、東大に事業が移管された以降の実態は、どのようなものであったのだろうか。移管後に発行された『満鮮地理歴史研究報告』は、1915年12月発行の第一冊から、1941年10月発行の第十六冊まで、全16冊であり、発行元は東京帝国大学文科大学もしくは同文学部である³³⁾。

執筆者のうち、箭内互と池内宏は東大の教員となっているが、津田左右吉は早稲田大、松井等は国学院大の教員となっている³⁴⁾。また、1930年8月刊行の第十二冊からは、和田清が執筆者に加わっている³⁵⁾。

表.3 『満鮮地理歴史研究報告』第一冊から第十六冊 目次

著者	タイトル	著者	タイトル
第一冊			
津田左右吉	勿吉考	津田左右吉	渤海考
津田左右吉	室韋考	松井等	契丹勃興史
津田左右吉	安東都護府考	松井等	契丹可敦城考 附阻卜考
第二冊			
津田左右吉	遼代烏古敵烈考	箭内互	金の兵制に関する研究
津田左右吉	達盧古考	池内宏	鮮初の東北境と女真との関係(一)
第三冊			
池内宏	鉄利考	松井等	遼代紀年考
津田左右吉	遼の遼東経略	箭内互	元代社会の三階級
松井等	五代の世に於ける契丹(上)		
第四冊			

松井等	契丹の国軍編制及び戦術	箭内互	蒙古の高麗経略
松井等	宋対契丹の戦略地理	池内宏	鮮初の東北境と女真との関係(二)
津田左右吉	金代北辺考		
第五冊			
池内宏	高麗成宗朝に於ける女真及び契丹との関係	津田左右吉	遼の制度の二重体系
箭内互	韃靼考	池内宏	鮮初の東北境と女真との関係(三)
松井等	北宋の対契丹防備と茶の利用		
第六冊			
津田左右吉	上代支那人の宗教思想	箭内互	元代の東蒙古
第七冊			
池内宏	高麗太祖の経略	池内宏	高麗顯宗朝に於ける契丹の侵入
松井等	契丹に対する北宋の配兵要領	池内宏	鮮初の東北境と女真との関係(四)
第八冊			
津田左右吉	百済に関する日本書紀の記載	池内宏	朝鮮高麗朝に於ける女真の海寇
松井等	契丹人の信仰	箭内互	元代の官制と兵制
第九冊			
津田左右吉	三国史記高句麗紀の批判	池内宏	完顔氏の曷懶甸経略と尹瓘の九城の役 附蒲盧毛朶部に就いて
松井等	契丹人の衣食住	箭内互	元朝牌符考
第十冊			
池内宏	金末の満洲	津田左右吉	神儒思想に関する二三の考察
池内宏	蒙古の高麗征伐		
第十一冊			
津田左右吉	漢代政治思想の一面	池内宏	金史世紀の研究
第十二冊			
池内宏	曹魏の東方経略 附毋丘儉の高句麗征伐に関する三国史記の記事	和田清	兀良哈三衛に関する研究(一)
池内宏	高句麗滅亡後の遺民の叛乱及び唐と新羅との関係	津田左右吉	前漢の儒教と陰陽説
第十三冊			
池内宏	肅慎考	和田清	兀良哈三衛に関する研究(二)
池内宏	夫餘考	津田左右吉	儒教の実践道徳

「満鮮史観」の再検討（桜沢）

和田清	明初の蒙古経略 特にその地理的研究		
第十四冊			
池内宏	百済滅亡後の動乱及び唐・羅・日三国の関係	和田清	明初の満洲経略（上）
第十五冊			
池内宏	勿吉考	津田左右吉	「周官」の研究
和田清	明初の満洲経略（下）		
第十六冊			
池内宏	楽浪郡考 附遼東の玄菟郡とその属県	池内宏	高句麗討滅の役に於ける唐軍の行動

『満鮮地理歴史研究報告』第一冊から第十六冊の目次を基に筆者が作成した。

表3に見られるように、『満鮮地理歴史研究報告』に掲載された論文は、「満洲史」、朝鮮史、蒙古史、中国思想史と多岐にわたっている³⁶⁾。そのうち、第二・四・五・七冊の4回にわたって連載された池内宏「鮮初の東北境と女真との関係」は、「李王朝成立に重要な役割を演じた朝鮮の東北境の女真人の実態を追求し、高麗朝末期・李王朝初期における李成桂一家との関係について」論じたもので、「李王朝の成立の由来と、その性格の重要な一面を明らかにしたものである」として、高く評価されたという³⁷⁾。これは、朝鮮王朝の成立背景を、女真人との関係という視点から考察したものであり、「満鮮関係史」とでも称すべきものであろう。

こうして「満鮮歴史地理調査部」の事業内容を具体的に見て来ると、そこで行なわれた研究が「満鮮史研究」であるという理解には、検討の余地があるものと思われる。従来の研究では、「満鮮歴史地理調査部」は「満鮮史研究」が行なわれた機関であると見做されて来た。しかし、実際にそこで行なわれた研究は、東大移管前は「満洲史」と朝鮮史であり、移管後は「満鮮関係史」を含む、多岐にわたるものであった。研究者それぞれの歴史認識は、個々の論著にあたらなければ明らかにできないものであり、「満鮮」の二文字を冠していれば「満鮮史研究」を行なう機関であるというような、単純な図式に当てはめることはできないであろう。それでは、「満鮮」や「満鮮史」という用語は、どのような意味で使用されたのであろうか。

二、「満鮮史」という用語

白鳥庫吉は、1934年に発表された談話録である「満鮮史研究の三十年」において、次のように述べている。

以上の如く、我々は過去三十年の永い間満洲及朝鮮の歴史を根本から研究しているにも拘らず、世間でこの事実を知っている人が極めて少数であるのは甚だ遺憾である。併し、今後これらの研究に没頭しようとする人達は少くともこの我々が残した研究を参考として更らに新たな研究をなすことが出来ると言い得る。又満鮮歴史研究三十年の間に前述の如く人物の方では、途中で箭内博士だけは故人となったが、池内宏博士は現に東大教授、津田左右吉博士は早大の教授として、亦稲葉岩吉博士、瀬野馬熊氏の二人は朝鮮総督府の修史官として、いづれも学界に枢要な位置を占めているのは、満鮮史研究三十年間に得た一大収穫として我々の等しく誇りとするとところである。此の点満鉄としても金の出し甲斐があったと言うべきである³⁸⁾。

ここで白鳥は、まず「過去三十年の永い間満洲及朝鮮の歴史を根本から研究している」と述べた上で、「満鮮歴史研究三十年の間」や、「満鮮史研究三十年間」という表現を用いている。ここから、白鳥の言う「満鮮史」とは、「満洲及朝鮮の歴史」の省略形に過ぎないと言えるであろう。

また、池内宏は『満鮮史研究 中世第一冊』の序文において、次のように述べている。

岡書院主茂雄君から満洲・朝鮮の歴史に関する余の研究論文をまとめて発刊する勧めを受けたのは五・六年前のことであった。(中略)

此の一冊には、主として満洲に関する論文十三篇を収めた。時代は姑く中世の名の下に、大体遼・金・元三朝の間に限ったが、其の前後にも及んでいる。(中略)

中世の第二冊及び第三冊に盛られる論叢は、第一冊と同じ時代の高麗関係のものである。満洲と朝鮮とは歴史上極めて密接なる関係にあるから、他日拙著の出版が第二冊以下に及ぶならば、それ等は第一冊と腹合せをなすであろう³⁹⁾。

ここから、池内の著作集である『満鮮史研究』の、「満鮮史」が意味するところは、「満洲・朝鮮の歴史」であることが分かる。中世篇で言えば、第一冊は主として「満洲史」論文を収め、第二・三冊は朝鮮史論文を収めていた⁴⁰⁾。このことから、「満鮮史」という用語の意味するところが、実際は「満洲史」と朝鮮史であったと言えるであろう。池内の『満鮮史研究』は、「満洲と朝鮮とは歴史上極めて密接なる関係にある」という考えの下、「満洲」・朝鮮に関する研究をまとめたものであり、「満鮮史」という一つの歴史的枠組みにおいて研究されたものではなく、「満鮮関係史」とでも称する方が、その内実に相応しいものであった。

旗田も、「満鮮史という名目で研究した人々の研究内容は、実は朝鮮・満洲のそれぞれの歴史のよせ集めであって、両者をふくむ一つの世界を研究したものはない」としている⁴¹⁾。

「満鮮史」という枠組みが、実際は「満洲史」と朝鮮史であったのなら、当時において、「満洲史」とは何であり、朝鮮史とは何であったのかということを考える必要がある。このうち、現在でも用いられている枠組みは朝鮮史のみで、「満鮮史」と同様に「満洲史」という枠組みも用いられていない。これは「満洲」という呼称が、日本の植民地支配や「満洲国」との関連から、現在では用いるべきでないものとされており、中国東北と呼ぶのが一般的である

所にその理由があろう。もともと、「満洲」とは民族名あるいは国家名であったものが、欧米人や日本人によって地域名として用いられるようになり、1907年に東三省総督が置かれて以降は東三省の領域を指すようになったものである⁴²⁾。

それでは、1907年以降、「満洲史」の地域的範囲は東三省の領域であったと言えるのであろうか。この問題に関連して、「満鮮歴史地理調査部」の調査対象となった地域について、稲葉は次のように回想している。

これから歴史調査の内容の一端をお話したいのですが、わたくしども（「満鮮歴史地理調査部」 桜沢註）は協議に依りまして、満洲なるものの歴史地理的範囲を協定したのであります。

「満洲」と言ふ称呼程従来曖昧なものはない。「満洲」は支那の行政上の地名ではない。地理上の名称でもない。単に外国人が、「満洲」と言ふ名称を附けただけで、其の範囲も頗る漠然たるものであります。（中略）

扨て、私共が歴史整理の範囲を決めする時に当りましては以上の見解であり、歴史調査の範囲について色々和研究討議致しましたが、わたくし共は申す迄もなく、今日の満洲国に相当する地域全部黒竜江のソビエト領全部をば満洲歴史地理の範囲に入れる事に確定しました。のみならず山海関の西方冀東地域も入れたのであります。わたくしどもの、この見解は北支と満洲は不可分であったと言ふ史実に基づくからであります。長城は、満支を限るものではない。北支に関しての研究を進めなければ満洲は判らない、北支地理を考へなければ、満洲地理は分らないと言ふ立て前から、今言った如く北支の熱河方面と冀東方面を調査範囲に入れる事にした。他方、朝鮮半島の研究を最も必要と存じまして、池内、津田両博士は之に参加し、専らこの方向の歴史地理研究を担当することとなったのであります⁴³⁾。

「満鮮歴史地理調査部」では、稲葉の回想中に述べられているように、「今日の（1939年当時 桜沢註）満洲国に相当する地域全部」、「黒竜江のソビエト領全部」、「北支の熱河方面と冀東方面」という広範囲を「満洲歴史地理の範囲」とすることに決定されていた。ここから、実際に研究対象とされた範囲と、当時の「満洲」が指していた範囲は、同じではないということが分かる。

またここから、当時において「満鮮」や「満蒙」と呼ばれた地域と、「満鮮史」や「満蒙史」の研究対象となった範囲についても、全く同一という訳ではなかったのではないかと考えられる。もちろん、同じく「満鮮史」や「満蒙史」と称していても、研究者ごとに、もしくはその論著で扱われているテーマによって、研究対象となる範囲は異なってくるであろう。

ところで、「満鮮史」という用語が使われ始めた時期は、いつなのであろうか。この問題については、未だ明確になってはいない。白鳥が『満洲歴史地理』序文において「満・韓史」と称していることは先に述べたが、「満韓史」の使用が「満鮮史」に先行するのであれば、「満韓史」から「満鮮史」へ移行した時期が、「満鮮史」の使用開始期であると言えるであろう。『史学雑誌』の彙報欄

に記された東大の講義名については、既に旗田も言及するところであるが、旗田は、「朝鮮史から満鮮史（満韓史）への移行、また両者の併存の状態をよく示す」ものとしてそれをとり上げ、「満韓史」から「満鮮史」への移行という視点からの検討は行っていない⁴⁴⁾。ここでそのような視点からそれを見てみると、1913・1914年に白鳥庫吉が担当する講義として「満韓上代史」があり、その後も1915年に池内宏が担当した「満韓史（高麗時代）」や、1916年に白鳥が担当した「満韓民族史（自漢至隋）」、同年に池内が担当した「満韓史」がある。「満鮮史」という講義名が初めて現われるのは、1921年に池内が担当した講義である⁴⁵⁾。東大の講義名のみから言えば、「満韓史」から「満鮮史」への移行は、1916年から1921年の間ということになる。

この問題に関するもう一つの事例としては、先に挙げた『満洲歴史地理』序文と、白鳥が1914年3月に『文禄慶長の役 正編第一』に書いた序文が挙げられる。白鳥は、『文禄慶長の役 正編第一』序文において、「満韓史」ではなく「満鮮史」と表記している。白鳥による表記の「満韓史」から「満鮮史」への移行は、1913年から1914年の間であると思われる。

茲に公刊せんとする文禄慶長の役は余等が南満洲鉄道会社の依頼によりて従事せる満鮮史研究の一部にして池内宏氏の調査せしところに係る。同氏は李朝時代の朝鮮を担任せるを以て、先ず、同時代に於ける最も重大なる事件にして其の関係するところ頗る広く、且つ我が国民の行動に出でたる此の戦役を撰びて研究の主題となしたるなり⁴⁶⁾。

ここで白鳥は、「満鮮歴史地理調査部」で行なった研究を、「満鮮史研究」と称している。しかし、同書の内容は、「満鮮史研究」と言うよりは、日朝関係史と称すべきものであろう。「満鮮歴史地理調査部」で行なわれたその他の研究も、「満鮮史研究」と呼ぶようなものではなかったことは、前節で見た通りである。

ここまで、「満鮮史」という用語に関連して、いくつかの視点から検討してきた。そこから、「満鮮史」の名の下に行なわれた研究は、実際には「満洲史」と朝鮮史、あるいは「満鮮関係史」や日朝関係史とでも称する方が、その内実に対応しいものであり、「満鮮史」という枠組みにおいて研究されたものではなかったことが明らかとなった。それでは、旗田が「満鮮史」の主唱者として批判した、稲葉の「満鮮史観」とは、どのようなものだったのであろうか。

三、稲葉岩吉の「満鮮史観」

先に述べたように、旗田が「満鮮史」について考察する上で検討の対象としたのは、主として稲葉岩吉の主張であり、他の研究者についてはほとんど検討がなされていない⁴⁷⁾。旗田は、稲葉の「満鮮史体系の再認識」から、以下の箇所を引用している。

かつて、満鮮歴來の史上よりして、わが半島の地位を考うるに、われらの従前想定したものの多くは、局部的見解にとどまり、又たあまりに単純簡略に失するものであろうことを注意するのである。就中、われらには大陸とわが半島との錯雑した関係に対しては、幾

んど考慮を払わぬという憾みがある。局部的見解とは、朝鮮の領土内に発生した事件をもって、すべてこの民族の機構よりすとのみ解釈して、他を顧みないという傾向である。（中略）満鮮一家といわざるも、双方の関係の極めて密接であったことは、別に多言を要するまでもないのであるが、わたくしは、朝鮮半島に現われた大事件は、一として東亜全局の問題の反映に外ならぬことを述べて置きたいのである⁴⁸⁾。

このような稲葉の記述から、旗田は、稲葉にとって「朝鮮史の自主的發展を認めることは、意識的にも無意識的にも、不可能なことであった。そして稲葉博士の学風に反発した多くの研究者も、その考えの基本をなす朝鮮史の自主性の欠除という点については、何の反論も示さず、むしろこれを支持した」としている⁴⁹⁾。ここから分かるように、旗田の「満鮮史」批判とは、朝鮮史の「自主的發展」を認めない考えに対する批判であった。

また、旗田は、稲葉が「満鮮史」の立場から、檀君神話に基づく「民族的主張」に反対したとしている⁵⁰⁾。

当時、朝鮮人のなかで檀君神話がとなえられたのに対して、稲葉岩吉は、檀君神話の架空性を批判する一方、「満鮮不可分論」を主張し、朝鮮歴代の王家は、満州あるいは大陸からの敗残者が朝鮮に逃げこんだものであり、朝鮮と満州とは、政治的・経済的に一体「不可分」であり、朝鮮だけの、独自の存在はありえないことを主張した⁵¹⁾。

当時、日本人研究者の多くは、檀君を神話・伝説上の存在であるとして、歴史研究において取扱うことに否定的であった。また、檀君神話は北方のツングース系統のものであり、今日の朝鮮民族の主流をなす韓族の神話ではないということも、あわせて主張された。今西竜は、自身の檀君に関する考察結果をまとめ、次のように述べている⁵²⁾。

而して特に注意すべきは檀君は本来、扶餘・高句麗・満洲・蒙古等を包括する通古斯族中の扶餘の神人にして、今日の朝鮮民族の本体をなす韓種族の神に非ず。彼の父母の一を神とし、他の一を獣類とする伝説は、仏教的装飾や道教的影響に依りては決して生ずるものに非ずして通古斯民族の祖神に特有なるものなりとす。檀君の前身者たる仙人王儉を楽浪・帯方漢人の祀神に統を引くものに非ずして、高句麗人の祭りし解慕漱なるべしと推定するの外なきは実に此一点にあり。父母のいずれかを獣類とするは、日韓民族の神には見るべからざるものなり⁵³⁾。

今西は、檀君を「扶餘の神人」であるとして、「今日の朝鮮民族の本体をなす韓種族の神」ではないと述べている。このような檀君認識は、朝鮮古代史の中心を新羅と見て、「満洲」を舞台に活動した高句麗や渤海等は、「満洲史」の一部であるとする（ただし、高句麗は朝鮮史の一部でもある）認識に由来するものであろう。

これに対して、稲葉岩吉は植民地期の日本人研究者の中では珍しく、檀君認識の広まりに対して肯定的な発言をしている。

兎に角三国時代の三分の二は満洲民族が此の領土に移住して当時の文化を植付けて居っ

たということは争われない、それを慶州新羅が統一して国家を成したのでありますから、今日の朝鮮民族の中には多数の満洲民族が包含されて居るということを認めなければならぬのであります。是は歴史上争われない事実であります、しかし私の知り得る朝鮮人の多くには斯様な解説は受容られない傾向があります、矢張り慶州民族は天降である、我々は新羅の子孫であるということが朝鮮人の頭から抜けないのであります、それは偏狭にすぎはせぬかと私は思うのであります、即ち満洲から起った民族も我々と同源同民であるという解釈が最も正しい朝鮮の歴史の解釈ではないかと考えるのです。先程申しました高句麗・百濟の始祖は朱蒙（東明）と申します、朱蒙が夫餘から出て居るということは否定するものがありませぬが、朝鮮の記録に依ると朱蒙は檀君の子であるということである（中略）朝鮮の人が既に檀君を以て朝鮮民族の開祖であると致しますと、満洲の広野に民族の形をなして文化を発生した夫餘の集団は矢張り朝鮮民族の祖先と同じものから分れたものであるという解釈になるのであります⁵⁴。

稲葉は、「高句麗・百濟の始祖」である「朱蒙（東明）」が「檀君の子」であることから、檀君神話を「満洲」と朝鮮の密接な関係を主張する論拠の一つに位置づけている。

稲葉が檀君神話に対して肯定的な発言をしていることに対しては、滝沢規起が既に指摘するところであるが、滝沢は、その理由を、檀君神話が稲葉の「満鮮史観」にとって都合のいいものであったからであるとしている⁵⁵。

稲葉が檀君神話に対して肯定的な発言をしたのは、それが朝鮮と「満洲」の密接な関係を主張する上で、根拠となり得るものと考えられたためと思われる。稲葉が「満洲」を重視したのは、彼が現代的関心から研究を始め、清朝史研究者として研究生活に入ったことと、彼が生涯にわたって師事した内藤湖南の影響が考えられる⁵⁶。稲葉が「満鮮歴史地理調査部」や朝鮮総督府の朝鮮史編纂事業に参加したのも、内藤の命によるものであった⁵⁷。稲葉は、朝鮮史を自身の研究対象としながらも、それは「満洲史」と合わせて考察してこそ明らかになるものであると主張していた⁵⁸。また、稲葉は、「新羅を基礎とする朝鮮史家の見解では駄目」だとしているが⁵⁹、新羅を中心とする朝鮮史認識においては、朝鮮史と「満洲」との関連性が希薄になるため、そのような主張をするに至ったものと思われる。

ところで、総督府の朝鮮史編纂事業によって刊行された『朝鮮史』には、渤海史に関する記事がほとんど収録されなかった⁶⁰。その理由は、当時の日本人研究者の間において、渤海史が朝鮮史の一部ではなく、「満洲史」の一部と認識されていたためであると思われる。

1915年7月、中樞院において「朝鮮半島史」の編纂に着手し、朝鮮史編纂事業が開始された⁶¹。1922年12月、朝鮮史編纂委員会が設置され、1923年1月8日から10日にかけて、第1回編纂委員会が開かれた。その席上、李能和からの「渤海は何処へ這入りますか」という質問に対して、稲葉は、「渤海に就きましては新羅を叙する処で渤海及び之に關聯した鉄利等の記事をも収載する積りであります」と回答している⁶²。しかし、新羅・渤海が記述対象となる古

代史部分は、第1回編纂委員会を留学中につき欠席していた今西竜の担当であった。

1925年6月に公布された勅令第218号朝鮮史編修会官制によって、朝鮮史編纂委員会は朝鮮史編修会へと改編され、『朝鮮史』の組織的な編纂体制が整った。今西は、1930年8月22日に開かれた朝鮮史編修会第4回委員会の席上、崔南善からの質問に答えて「渤海も朝鮮史に関係ない限りは省きます」と発言している⁶³⁾。ここから、今西が渤海史を朝鮮史の一部とは考えていなかったことが分かる。

では、稲葉は渤海史をどのように認識していたのであろうか。新羅を中心とする朝鮮史認識に批判的であり、渤海史に関する記事を『朝鮮史』に収録すると発言した稲葉であれば、渤海史を朝鮮史の一部と考えていたかのように思われる。しかし、稲葉が朝鮮史部分を執筆担当している『世界歴史大系 第十一巻 朝鮮・満洲史』（1935年）では、高句麗は朝鮮史と「満洲史」の両方でとり上げられているのに対し、渤海は「満洲史」でのみとり上げられ、朝鮮史ではほとんど記述されていない⁶⁴⁾。渤海史に関する記事を、『朝鮮史』に収録するつもりであるとする稲葉の発言は、彼が朝鮮史研究における「満洲史」の重要性を主張していることに由来するものであろう。稲葉も、他の日本人研究者と同様に、渤海史を朝鮮史の一部ではなく「満洲史」の一部と考えていたものと思われる⁶⁵⁾。

稲葉は、夫餘系の高句麗と百済を新羅が統一したことによって、「今日の朝鮮民族の中には多数の満洲民族が包含されて居る」とした⁶⁶⁾。そのため、渤海史を朝鮮史の一部と見做さずとも、朝鮮史における「満洲」の重要性を主張することができたのである。また、このような稲葉の歴史認識は、当時の日本人研究者の間において広く共有されていたものではないため、「満鮮不可分論」という稲葉個人の主張として検討すべきものと思われる。

稲葉の「満鮮不可分論」を代表する論文としては、「満鮮不可分の史的考察」が挙げられるが、ここで稲葉は、自身の見解を次のように述べている。

私が、今、満鮮不可分を民族的、歴史的及び経済的の三方面から、史上考察を試みた次第は、外ではないのである。新聞やなどによると、鮮人の満洲移住者は、三百万をも超過し、尚お顕著の増加を示しているが、その割合に、それら鮮人を保護するの途が、十分でないらしく思われるのである。それには、支那官憲の諒解の十分でないことが原因を成す場合もあり、支那人の悪分子が、鮮人の無智を欺罔する場合もあるが、我が内地人の該方面に対しての、智識が決して十分であるとは思われないのである。私どもは、今日の鮮人の血管中には、高句麗人や渤海人や、女真人のそれが、包含されていることを信じ、その満洲移住は、寧ろ、祖宗の故地に還元するのではないかと想像せざるを得ないのである。我等内地人は、この民族的一大使命の遂行について、大に援助せなければならぬ。先ず我々の思想より、満鮮界限の存在を除去して、その不可分なることに、十二分の諒解を置かなければならぬ。凡べては、この信条を逐うて施設し得ることを思うのである⁶⁷⁾。

稲葉は、「高句麗人や渤海人や、女真人」といった満洲系民族が、現代の朝鮮民族を構成す

る要素の一部であるとして、「満鮮不可分」を主張し、朝鮮人の「満洲」移住を日本人が援助すべきであるとしている。稲葉は、「わたくしは、他の同僚と発身を異にし、学問の為に学問をしたものではなく、当時の支那問題に刺戟を受け、その必要より、清朝史を研鑽したものである」と述べている⁶⁸⁾。また、その著書『清朝全史』を、「時代の要求を満足せしめんとするの意に出でし」ものであるとし⁶⁹⁾、その後の著書についても、「大率ねこの趣旨によりて時代要求に応副して来た」と述べているが⁷⁰⁾、彼の主唱した「満鮮不可分論」についても、時事問題に対する発言との関連の中で捉え直す必要が感じられる。

ここまで稲葉の「満鮮史観」について、その檀君神話と渤海史に対する認識を中心として見てきた。稲葉は、「満洲」と朝鮮が密接な関係にあるとして、「満鮮不可分」を主張していた。しかし、「満鮮史」という枠組みにおいて研究を行っていたわけではなく、「満洲史」と朝鮮史という枠組みの下に研究を行ないながら、朝鮮史研究における「満洲」の重要性を主張していたと言えよう。

結びにかえて

これまでの研究では、「満鮮史」という枠組みを、「満洲」と朝鮮の歴史をひとまとめにしたものであると理解してきた。しかし、本稿で検討してきた結果から改めて考えると、「満鮮史」という枠組みは、「満洲史」と朝鮮史という枠組みの存在を前提としたものであった。「満鮮史」という用語は、当初は「満洲及朝鮮の歴史」の省略形に過ぎなかったものであるが、稲葉はその「満鮮不可分論」によって「満鮮史」研究を主唱した。稲葉の「満鮮不可分論」と、「満鮮史」という枠組みとの関連については、検討の余地があるものと思われる。

本稿では、「満鮮史」とは何であったのかという問題について考察する上で重要と思われる論点について、現時点での筆者の考えを述べると共に、今後検討が必要と思われる論点を挙げたに過ぎない。今後、関連する論著に対する個別具体的な検討を行なった上で、その結果を基に、「満鮮史」という枠組みと、「満鮮史」という用語を使用した研究者の歴史認識に対する考察が行なわれてこそ、本稿は意義を持つものである。

<注>

- 1) 旗田巍「日本における東洋史学の伝統」『歴史学研究』第270号、1962年11月。同論文は、幼方直吉他編『歴史像再構成の課題 歴史学の方法とアジア』(御茶の水書房、1966年11月)に改稿の上、収録されている。同「「満鮮史」の虚像 日本の東洋史家の朝鮮観」『鈴木俊教授還暦記念 東洋史論叢』鈴木俊教授還暦記念会、1964年10月。同「朝鮮史研究の課題 朝鮮史研究会第2回大会によせて」『歴史学研究』第294号、1964年11月。同「日本人の朝鮮観」『アジア・アフリカ講座3 日本と朝鮮』勁草書房、1965年3月。同「朝鮮史研究の課題」朝鮮史研究会・旗田巍編『朝鮮史入門』太平出版社、1966年11月。同「日本における朝鮮史研究の伝統」旗田巍編『シンポジウム 日本と朝鮮』勁草書房、1969年1月。同『日本人の朝鮮観』勁草書房、1969年5月。同「朝鮮史像と停滞論」野原

「満鮮史観」の再検討(桜沢)

- 四郎編『近代日本における歴史学の発達 下』青木書店、1976年10月。同「日本における朝鮮史研究について」野原四郎編前掲『近代日本における歴史学の発達 下』。同「朝鮮史像の諸問題」朝鮮史研究会編・旗田巍監修『新 朝鮮史入門』竜溪書舎、1981年6月。同『朝鮮と日本人』勁草書房、1983年11月。以下の註も含め、発行地が東京の場合は省略する。
- 2) 旗田巍前掲「満鮮史」の虚像 日本の東洋史家の朝鮮観 」。
 - 3) 同上、474頁。
 - 4) 稲葉岩吉「満鮮史体系の再認識(上)・(中の一)・(中の一)・(下)」『青丘学叢』第11・12・13・14号、京城、1933年2・5・8・11月。同『増訂 満洲発達史』(日本評論社、1935年1月)に収録されている。
 - 5) 稲葉君山「朝鮮の文化問題」『東亜経済研究』6 2、山口、1922年。同『支那社会史研究』(大鑑閣、1922年9月)に収録されているものを参照した。君山は稲葉岩吉の号である。
 - 6) 稲葉君山「満鮮不可分の史的考察」『東洋』25 5、1922年。前掲『支那社会史研究』に収録されているものを参照した。
 - 7) 旗田巍前掲「満鮮史」の虚像 日本の東洋史家の朝鮮観 」。476頁。
 - 8) 同上、489頁。
 - 9) 酒寄雅志『渤海と古代の日本』校倉書房、2001年3月、「あとがき」487頁。古畑徹「戦後日本における渤海史の歴史的枠組みに関する史学史的考察」『東北大学 東洋史論集』第9輯、仙台、2003年1月、244頁。
 - 10) 田中隆一「対立と統合の「鮮満」関係 「内鮮一体」・「五族協和」・「鮮満一如」の諸相 」。『ヒストリア』第152号、京都、1996年9月、106頁。
 - 11) 井上直樹「日露戦争後の日本の大陸政策と「満鮮史」 高句麗史研究のための基礎的考察 」。『洛北史学』第8号、京都、2006年6月、77頁。
 - 12) 「満鮮史」関連の先行研究としては、本文で挙げた他に、次のような研究がある。青柳純一「白鳥庫吉と「満鮮史」学の虚像」『人文論叢』釜山大学校人文学研究所、釜山、2000年6月。寺内威太郎「満鮮史」研究と稲葉岩吉」『植民地主義と歴史学 そのまなざしが残したもの 』刀水書房、2004年3月。また、韓国においても戦前の日本人による朝鮮史観・朝鮮史研究に対して批判的研究が行われている。韓国における先行研究については、趙東杰『現代韓国史学史』(나남출판, ソウル、1998年9月、241-242頁)を参照されたい。
 - 13) 三ツ井崇「満鮮史」と朝鮮語学 白鳥庫吉の朝鮮語系統論をめぐる言語系統論と歴史観の問題について 」。『人民の歴史学』138号、1999年1月。同「白鳥庫吉の歴史認識形成における言語論の位相 朝鮮語系統論と朝鮮史認識をめぐる言説から 」。『史潮』新48号、2000年11月。
 - 14) 滝沢規起「稲葉岩吉と「満鮮史」」。『中華世界と流動する民族』社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書第37集、千葉大学大学院社会文化科学研究科、千葉、2003年3月。同「이나라 이와키치稲葉岩吉와 「만선사満鮮史」 」。『한일관계사연구』第19輯、ソウル、2003年10月。
 - 15) 滝沢規起前掲「稲葉岩吉と「満鮮史」」。63頁。
 - 16) 井上直樹「近代日本における高句麗史研究 「満鮮史」・「満洲史」と関連させて 」。『高句麗研究』第18輯、ソウル、2004年12月。同前掲「日露戦争後の日本の大陸政策と「満鮮史」 高句麗史研究のための基礎的考察 」。
 - 17) 井上直樹前掲「近代日本における高句麗史研究 「満鮮史」・「満洲史」と関連させて 」。337-338頁。
 - 18) 旗田巍前掲「朝鮮史研究の課題」21頁。寺内威太郎前掲「満鮮史」研究と稲葉岩吉」27-30頁。
 - 19) 南満洲鉄道株式会社編『南満洲鉄道株式会社十年史』南満洲鉄道株式会社、大連、1919年5月。同書の復刻版である『明治百年史叢書』第239巻(原書房、1974年12月、907-908頁)を参照した。
 - 20) 稲葉君山『後藤新平伯と「満洲歴史調査部」』南満洲鉄道株式会社鉄道総局弘報課、奉天、1939年12月。
 - 21) 白鳥庫吉「後藤伯の学問上の功績」『吾等の知れる後藤新平伯』東洋協会、1929年7月、129頁。『白鳥庫吉全集』第10巻(岩波書店、1971年11月)所収。
 - 22) 白鳥庫吉「序文」『満洲歴史地理』第一巻、南満洲鉄道株式会社、1913年9月、1頁。前掲『白鳥庫吉全集』第10巻所収。
 - 23) 「池内宏博士略歴」に「明治四十一年四月より大正三年四月まで南満洲鉄道株式会社より「満洲歴史調査」を嘱託せらる」とある。東方学会編『東方学回想 先学を語る(2)』(刀水書房、2000年2月)を参照した。初出は『東方学』第48輯、1974年7月。1908(明治41)年の津田左右吉の日記は8月からしか残っていないため、池内と同じく4月から参加したかは分からないが、8月には既に参加している(『津田左右吉全集』第26巻、岩波書店、1965年11月、445-446頁)。
 - 24) 白鳥庫吉「満鮮史研究の三十年」『国本』第14巻第9号、1934年9月、13頁。前掲『白鳥庫吉全集』

第10巻所収。

- 25) 中村栄孝他編『瀨野馬熊遺稿』瀨野いと、1936年10月、池内宏「序」2・5頁。
- 26) 白鳥庫吉前掲「満鮮史研究の三十年」13-14頁。
- 27) 白鳥は、「現在(1934年 桜沢註)私とそれから池内宏、和田清、津田左右吉の諸博士がこれに従事」していると、東大移管後も自身が参加しているかのように述べている(前掲「満鮮史研究の三十年」14頁)が、『満鮮地理歴史研究報告』には、序文等も含め、白鳥による記述は見られない。参加しているとしても、形式的なものであると思われる。
- 28) 石田幹之助「白鳥庫吉先生小伝 その略歴と学業」前掲『白鳥庫吉全集』第10巻、523・525頁。
- 29) 稲葉岩吉「予が満鮮史研究過程」『稲葉博士還暦記念 満鮮史論叢』稲葉博士還暦記念会、京城、1938年6月、19-21頁。
- 30) 前掲『満洲歴史地理』第一巻、『満洲歴史地理』第二巻、南満洲鉄道株式会社、1913年5月。『朝鮮歴史地理』第一巻、南満洲鉄道株式会社、1913年11月。『朝鮮歴史地理』第二巻、南満洲鉄道株式会社、1913年11月。池内の執筆した報告書は、『文禄・慶長の役正編第一』として、東大移管後の1914年8月に刊行されたが、発行元は南満洲鉄道株式会社であり、移管前の業績の一つである。また、池内宏『文禄・慶長の役別編第一』が、1936年12月に東洋文庫から刊行されている。
- 31) 前掲『朝鮮歴史地理』第一巻、「序」5頁。
- 32) 白鳥庫吉前掲「後藤伯の学問上の功績」130頁。
- 33) 『満鮮地理歴史研究報告』第一冊、東京帝国大学文科大学、1915年12月。以下、書名、発行元は省略する。第二冊、1916年1月。第三冊、1916年12月。第四冊、1918年4月。第五冊、1918年12月。第六冊、東京帝国大学文学部(第七冊以降も同)、1920年3月。第七冊、1920年6月。第八冊、1921年3月。第九冊、1922年5月。第十冊、1924年8月。第十一冊、1926年9月。第十二冊、1930年9月。第十三冊、1932年7月。第十四冊、1934年6月。第十五冊、1937年1月。第十六冊、1941年10月。
- 34) 「箭内互博士略歴」(前掲『東方学回想 先学を語る(2)』79頁)によれば、箭内は1913年に東京帝大講師、1918年に助教授、1925年に教授となり、1926年に亡くなるまで在職していた。「池内宏博士略歴」(前掲『東方学回想 先学を語る(2)』191頁)によれば、池内は1913年に東京帝大講師、1916年に助教授、1925年に教授となり、1939年に停年退官し、名誉教授となっている。家永三郎「津田左右吉」(『国史大辞典』第9巻、吉川弘文館、1988年9月、765-766頁)によれば、津田は1918年に早稲田大学教授に就任し、1940年に筆禍事件で退職するまで在職していた。高橋政清「松井等先生小伝」(『国史学』第33号、1937年12月、114-116頁)によれば、松井は1907年に国学院大学講師、1910年には教授となり、1937年に亡くなるまで在職していた。
- 35) 「和田清博士略歴」(東方学会編『東方学回想 先学を語る(4)』刀水書房、2000年5月、29-31頁)によれば、和田は1922年に東京帝大講師、1927年に助教授、1933年に教授となり、1951年に停年退官し、名誉教授となっている。
- 36) 第十四冊までの『満鮮地理歴史研究報告』に掲載された論文のうち、「満洲中世史」に関するものを中心に考察したものと、三上次男「満鮮地理歴史研究報告」を中心として見たる満洲中世史の研究」(『歴史学研究』第5巻第2号、1935年12月)がある。『歴史学研究』(復刻版)第5巻(青木書店、1974年6月)を参照した。
- 37) 三上次男「池内宏先生と「満鮮史研究」」池内宏『満鮮史研究 近世篇』中央公論美術出版、1972年3月、339頁。
- 38) 白鳥庫吉前掲「満鮮史研究の三十年」14頁。
- 39) 池内宏『満鮮史研究 中世第一冊』岡書院、1933年10月、「序」1-3頁。
- 40) 第三冊の序文によれば、同書に附録として収められている「蒲鮮万奴の国号に関する問題の再検討」は、第一冊に「収むべくして収めなかったもの」である(池内宏『満鮮史研究 中世第三冊』吉川弘文館、1963年6月、「序」2頁)。
- 41) 旗田巍前掲「満鮮史」の虚像 日本の東洋史家の朝鮮観」477頁。
- 42) 中見立夫「地域概念の政治性」『アジアから考える〔1〕交錯するアジア』東京大学出版会、1993年9月、276頁。細谷良夫「マンジュ・グルンと「満洲国」」『シリーズ世界史への問い8 歴史のなかの地域』岩波書店、1990年12月、105-108頁。
- 43) 稲葉君山前掲『後藤新平伯と「満洲歴史調査部」』10-12頁。
- 44) 旗田巍前掲「満鮮史」の虚像 日本の東洋史家の朝鮮観」491頁。
- 45) 『叢報』『史学雑誌』第24編第9号、1913年9月、1250頁。第25編第9号、1914年9月、1194頁。第26編第9号、1915年9月、1176頁。第27編第9号、1916年9月、1039頁。第32編第5号、1921年5月、419頁。
- 46) 白鳥庫吉監修・池内宏著『文禄慶長の役 正編第一』南満洲鉄道株式会社、1914年8月、白鳥庫吉

「満鮮史観」の再検討(桜沢)

- 「序」1頁。序文末尾に「大正三年三月」とある(同「序」4頁)。前掲『白鳥庫吉全集』第10巻所収。
- 47) 旗田は、「満鮮史」に関して考察する際に、稲葉岩吉とともに三品彰英にしばしば言及しているが、三品の朝鮮史認識に対しては、「他律性史観」を代表するものとしてとり上げている。
 - 48) 稲葉岩吉前掲「満鮮史体系の再認識(上)」1・2・4頁。
 - 49) 旗田巍前掲「満鮮史」の虚像 日本の東洋史家の朝鮮観 489頁。
 - 50) 同上 485頁。
 - 51) 旗田巍前掲「朝鮮史研究の課題」22頁。
 - 52) 今西竜は、1908年6月に東京帝大副手となり、1913年3月、京都帝大講師、1916年1月に同教授、1919年、官制改正により同助教授となった。1925年、朝鮮総督府朝鮮史編修会委員・同修史官となった。1926年、京城帝大教授となり、京都帝大教授と兼任し、1932年5月に亡くなるまで在職していた。田中俊明「今西竜」(江上波夫編『東洋学の系譜 第2集』大修館書店、1994年9月)等を参照した。
 - 53) 今西竜「檀君考」『朝鮮古史の研究』近沢書店、京城、1937年4月、125頁。初出は『青邱説叢』巻1、私家版、京城、1929年6月。『朝鮮古史の研究』は、1970年に国書刊行会から復刻刊行されている。
 - 54) 稲葉君山「朝鮮の領土問題民族問題及び鮮満文化関係に就て(一) 鮮満関係史の一節」『朝鮮』第148号、京城、1927年9月、12・14頁。これは1927年8月8日、同民夏季大学において行なわれた講演の速記録である。同民夏季大学については、内田じゅん「植民地期朝鮮における同化政策と在朝日本人 同民会を事例として」(『朝鮮史研究会論文集』第41集、2003年10月)に詳しい。
 - 55) 滝沢規起前掲「稲葉岩吉と「満鮮史」」62頁。
 - 56) 稲葉岩吉前掲「予が満鮮史研究過程」。同「満鮮史学上の内藤湖南博士 特に清朝史研究について」『朝鮮』第231号、京城、1934年8月。寺内威太郎前掲「満鮮史」研究と稲葉岩吉 50・52頁。
 - 57) 稲葉岩吉前掲「予が満鮮史研究過程」20・21・25頁。同『増訂 満洲発達史』日本評論社、1935年1月、「増訂版自序」1頁。
 - 58) 稲葉君山前掲『支那社会史研究』の序文には、「朝鮮の文化に関しての一二(「朝鮮の文化問題」・「満鮮不可分の史的考察」 桜沢註)を、本書に収めたのは、この民族の文化は、過半、支那に負っている、支那や満洲に諒解をもたずに、朝鮮を知らんとするのは失敗でなければならない、というのは、吾人が年来の諒解であるからである」としている(同書「序文」2・3頁)。
 - 59) 稲葉君山前掲「朝鮮の領土問題民族問題及び鮮満文化関係に就て(一) 鮮満関係史の一節」13頁。
 - 60) 朝鮮史編修会編『朝鮮史』第二編、朝鮮総督府、京城、1932年3月。
 - 61) 朝鮮総督府による朝鮮史編纂事業の経過については、『朝鮮史編修会事業概要』(朝鮮総督府朝鮮史編修会、京城、1938年6月)及び中村栄孝「朝鮮史の編修と朝鮮史料の蒐集 朝鮮総督府朝鮮史編修会の事業」(『日鮮関係史の研究 下』吉川弘文館、1969年)を参照されたい。
 - 62) 第1回朝鮮史編纂委員会、1923年1月8-10日(引用部分は9日) 前掲『朝鮮史編修会事業概要』19-21頁。李能和は、宗教史・風俗史・民俗学等の多くの分野に先駆的業績を残し、朝鮮仏教史研究の基礎を確立した。外国語学校の教官・校長、朝鮮総督府朝鮮史編修会委員等を歴任した(井上秀雄「李能和」『新訂増補 朝鮮を知る事典』平凡社、2000年11月、446頁)。
 - 63) 朝鮮史編修会第4回委員会、1930年8月22日、前掲『朝鮮史編修会事業概要』46頁。崔南善は、文学者・歴史学者。1919年、三・一独立運動に際して独立宣言文を起草した。朝鮮総督府朝鮮史編修会委員となった後、中樞院参議、「満洲国」建国大学教授等を歴任した(水野直樹「崔南善」前掲『新訂増補 朝鮮を知る事典』158頁)。
 - 64) 稲葉岩吉・矢野仁一『世界歴史大系 第十一巻 朝鮮・満洲史』平凡社、1935年7月。『朝鮮史・満洲史』(平凡社、1939年9月)は、書名のみを変えて刊行したものである。
 - 65) 稲葉は、同書の「緒言」において、「筆者は、又た最近に、かつての満洲発達史の増訂版を刊行して世に問うたのであるから、自然、本編と相参照されたいと思ふ。著者の宗旨は、満鮮一家論である。特におことわりして置く」としている(「緒言」4頁)。稲葉は、朝鮮史部分を執筆しながらも、それと自著である『増訂 満洲発達史』(前掲書)とを合わせ読むように望むことによって、「満鮮一家論」「満鮮不可分論」と同義であろう」という自身の主張に変わりがないことを読者に伝えている。
 - 66) 稲葉君山「朝鮮の領土問題民族問題及び鮮満文化関係に就て(二) 鮮満関係史の一節」『朝鮮』第149号、京城、1927年10月、26頁。
 - 67) 稲葉岩吉前掲「満鮮不可分の史的考察」314頁。
 - 68) 稲葉岩吉前掲「予が満鮮史研究過程」17頁。
 - 69) 稲葉岩吉『清朝全史』早稲田大学出版部、1914年4月、「緒言」10頁。
 - 70) 稲葉岩吉前掲「予が満鮮史研究過程」18頁。

主指導教員(關尾史郎教授) 副指導教員(井村哲郎教授・荻美津夫教授)